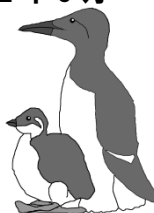


北の海鳥

十五号



『北の海鳥』十四号
令和4年9月17日
北海道海鳥保全研究会
天塩郡豊富町西3条5丁目



三沢沖で観察されたクビワオオシロハラミズナギドリ 2020/8/31 先崎理之 撮影

目次

1. 北海道沖の海鳥

- | | | |
|--------------------------|------|---|
| ・夏から秋の八苦航路 1 ～海洋熱波と南方系海鳥 | 先崎理之 | 2 |
| ・十勝沖海上鳥類海獣センサス 2021 年報告 | 城石一徹 | 6 |

2. 北海道周辺の海鳥繁殖地

- | | | |
|--------------------------------|-----------|----|
| ・天売島のヒメウ繁殖状況 | 長谷部真 | 10 |
| ・江差港湾内の養殖いかだで繁殖するウミネコとオオセグロカモメ | 三上修・三上かつら | 14 |
| ・青森県今別町の消波ブロックで営巣したウミネコ | 三上かつら | 16 |

3. 海鳥情報

- | | | |
|------------------------------|------|----|
| ・釧路市における海鳥類の観察記録② カイツブリ科～シギ科 | | |
| | 矢萩 樹 | 20 |

1. 北海道沖の海鳥

夏から秋の八苦航路 1

～海洋熱波と南方系海鳥

先崎理之（当会事務局長）

はじめに

我が国では、フェリー航路での探鳥が、外洋性海鳥を観察するためのメジャーな手法となっています。北海道には離島や本州との間を結ぶ定期航路がいくつかありますが、中でも青森県の八戸と苫小牧を結ぶ通称“八苦航路”は、週末にも手軽に乗り込め、様々な外洋性海鳥を観察できる道央圏のバーダーには最も馴染みのある航路です。

そんな八苦航路には私も昔から何となく適当に乗って海鳥を観察してきましたが、2020・2021年には風況と海水温に着目して見られる鳥に変化があるのかを探りながら乗船しました。その中でいくつか面白い観察をできましたので、何度かに分けて紹介したいと思います。今回は、昨今巷を賑わせている海水温が異常に高いとき（いわゆる海洋熱波のとき）に八苦航路で観察できた南方系海鳥について書きたいと思います。

南方系海鳥は海水温の上昇に伴い北上する？

表層水温は、海鳥の分布を決める重要な環境要因の一つです。北海道太平洋側の多くは親潮が卓越し、海鳥も寒流を好む種類が優占します。八苦航路上を含む北海道南部太平洋の最高表層水温の平年値は8～9月に20℃程度です。そのため、この海域では、四季を通して本州以南では少ない北方系海鳥が優占します。

一方、ここ数年の八苦航路上の表層水温は、7～9月にしばしば23～25℃程度にまで上昇しています。この水温はシロハラミズナギドリ類（*Pterodroma*）やオナガ

ミズナギドリといった通常は本州以南の熱帯・亜熱帯の外洋に生息する南方系海鳥が好む水温帯に接近します。そのため、表層水温が上昇しているときには、こうした南方系海鳥が八苦航路の海域にまで北上してくるかもしれません。

実際に観察してみた

そこで、2020年8月30・31日、9月12・13日、2021年7月27日、8月8日の航路上の表層水温が平年より3～5度程度高い日（表層水温が23～25℃程度）に乗船して、通常は暖流が卓越する本州中部以南の海域に分布する南方系海鳥を探索してみました。

その結果、特筆すべき種として、2020年8月30・31日にはクビワオオシロハラミズナギドリ（3羽）、オナガミズナギドリ（5羽）、オーストンウミツバメ（6羽）、9月12・13日にはシロハラミズナギドリ（1羽）、オナガミズナギドリ（1+羽）、2021年7月27日にはオーストンウミツバメ（1羽）が見られました。これらは全て通常は本州中部以南に分布する海鳥です。2021年8月8日には特筆種は見られませんでした。

これらの種のうち、クビワオオシロハラミズナギドリ（*P. cervicalis*）は2020年8月31日の三沢沖から尻屋崎沖で単独個体が3回観察されました（写真1, 2）。最北で出現した個体の観察位置は北緯41°23'17"、東経141°42'45"でした。オオミズナギドリに接近する大きさと後頸の白色部から類似のシロハラミズナギドリの仲間ではなく本種であることがわかりました。本種は、近年サハリン東部沖での記録がありますが、日本ではこれが最も北の観察記録となります。3羽ともに翼や体羽を換羽しており、換羽状況と模様から全て別個体でした。なお、本種には、別種または亜種とされるバヌア

ツシロハラミズナギドリ (*P. occulta* または *P. c. occulta*) という形態が酷似する個体群がありますが、今回観察された個体はど

れも初列風切下面の白色部がかなり広く、クビワオオシロハラミズナギドリに合致していました。



写真1 三沢沖で観察されたクビワオオシロハラミズナギドリ（下） 2020年8月31日 オオミズナギドリに接近する大きさの大型のシロハラミズナギドリの仲間。この個体はバヌアツシロハラミズナギドリと比べて、体型や嘴が大柄で、翼下面前縁と初列風切下面の黒色部が小さいため、クビワオオシロハラミズナギドリに合致する。



写真2 写真1と同一個体 2020年8月31日 尾羽や雨覆は換羽中のように傷んだ羽が見受けられた。後頸が白い点で類似種と識別できる。

シロハラミズナギドリは、2020年9月12日に恵山の東側海域（北緯 41° 52' 56''，東経 141° 39' 28''）で単独で観察されました（写真 3）。この種は国内では小笠原周辺の島嶼で繁殖し、夏季には北緯 40 度程度まで北上すると考えられますが、寒流域には通常分布しないため、北海道海域ではこれまで証拠を伴う記録は

ありませんでした。そのため、今回が北海道初記録と思われます。オナガミズナギドリ（写真 4）、オーストンウミツバメ（写真 5）も、北海道や東北地方北部の海域では通常観察される種ではなく、国内における最北海域での記録の一つということになります。



写真3 恵山沖で観察されたシロハラミズナギドリ 2020年9月12日 周囲のオオミズナギドリより明らかに小さく、細かい上下動を繰り返していた。本種はこの個体のように初列風切の下面に黒斑があり、類似種と識別できる。



写真4 尻屋崎沖で観察されたオナガミズナギドリ 2020年8月31日 本種には暗色型と淡色型があるがこの個体は淡色型。この日の個体は全て淡色型で、他種のルーズな群れに混じるか、単独で観察された。2020年9月13日に見られた個体も淡色型だった。



写真5 尻屋崎沖で観察されたオーストンウミツバメ 2020年8月31日 日本周辺では伊豆から小笠原周辺の島嶼で冬季に繁殖する大型のウミツバメ類。写真から、風切上面は一様で白色のフラッシュがなく、腰がやや淡色であることが見て取れる。これらの点から類似のクロウミツバメやヒメクロウミツバメと区別できる。本種が非繁殖期を過ごす海域については断片的なデータがあるだけで詳しくはわかっていない。

なお、上記の日には通常は北海道以南で観察されるアシナガウミツバメも何度か見られましたが、この種は上記の日以外にもコンスタントに見られたため、詳細はまたの機会に譲りたいと思います。

おわりに

このように夏季の海水温の異常上昇に伴い、いくつかの種の南方系海鳥が、通常の

分布域外である八苦航路の海域まで北上してくることがあるようです。一方で、2021年8月8日には何も出現しなかったように、実のところ、海水温が高くなれば、いつも南方系海鳥が北上してくるわけではないようです。この辺りのことは、今後じっくりとデータを重ねて考えていきたいと思っています。

(次号へつづく)

十勝沖海上鳥類海獣センサス 2021年報告 城石 一徹

■はじめに

私が十勝沖での海上センサスを再始動した2019年3月から現在まで3年5ヶ月が経過しました（2019年の内容については北の海鳥10号をご覧ください）。2020年は数度傭船を試みたものの悪天候によって中止となったことに加え、COVID-19の感染拡大防止措置のための行動制限により、センサスの実施に至りませんでした。COVID-19の国内初の感染が確認されて2年半以上が経った今も尚、感染症の猛威は止まる所を知りませんが、2021年は比較的感染状況の落ち着いた期間に一度だけ沖へ出る機会に恵まれたため、以下のとおり報告します。



図1. 2022年7月25日の航路

■調査方法

センサスは2021年7月25日の午前5時から午前9時50分、第23白鷗丸を傭船して実施しました。当日の天候は曇り、気温20-24℃、海水水温は20℃前後、視界は濃霧に包まれており、視程50-200mという条件の下での実施となりました。

した。調査地は十勝厚内沖の海域で、厚内港を南東に25kmほど進み、北緯42度37分、東経144度00分付近で北へ変針し、北緯42度44分、東経143度59分付近まで進んだのち、厚内漁港へ向けた復路とするルートを走行しました（図1）。調査は舳先に1名以上の調査員を配置し、双眼鏡による目視調査で確認された記録を記録係1名へ種名、個体数、行動等を口頭で伝えて野帳へ記録しました。出港から帰港までは、GPS（GPSアプリケーションGeographica）により位置情報（GPXデータ）を取得しました。

表1. 2021年7月25日十勝沖における確認種及び確認個体数（鳥類）

No.	科名	種名	確認 個体数	確認割合 (%)
1	カモ科	シノリガモ	2	0.4
2		クロガモ	10	1.9
3	アホウドリ科	クロアシアホウドリ	4	0.7
4	ミズナギドリ科	オオミズナギドリ	319	59.1
5		ハイロミズナギドリ	2	0.4
6		ハシボソミズナギドリ	2	0.4
7	ウミツバメ科	コシジロウミツバメ	1	0.2
8	ウ科	カワウ	20	3.7
9		ウミウ	50	9.3
10	シギ科	キアシシギ	3	0.6
11		イソシギ	1	0.2
12		アカエリヒレアシシギ	42	7.8
13		ハイロヒレアシシギ	1	0.2
14	カモメ科	ウミネコ	29	5.4
15		オオセグロカモメ	30	5.6
16	ウミスズメ科	ウミガラス	3	0.6
17		カンムリウミスズメ	6	1.1
18		ウトウ	12	2.2
19	カラス科	ハシボソガラス	1	0.2
20	セキレイ科	ビンズイ	1	0.2
21	ムシクイ科	エゾムシクイ	1	0.2

■結果

本センサスでは11科21種の鳥類が確認されました（表1）。また、海棲哺乳類はカマイルカを確認しました（表2）。この時期に当海域で卓越するオオミズナギドリが他と比して多く見られ、確認された鳥類の個体数全体の6割近くを占めました。

(延べ 319 羽, 59.1%). オオミズナギドリ 30 羽以上が集まっている箇所ではカマイルカ数頭が同時に確認されました(写真1). クロアシアホウドリは延べ 4 羽を確認し, 少なくとも1羽の右跗蹠に金属足環が確認できました(写真2). ウミスズメ類はウミガラス, カンムリウミスズメ, ウトウの3種を確認しました. ウミガラスは延べ3羽を確認しました(写真3). カンムリウミスズメは延べ6羽を確認し, 陸から 15 kmほど沖合に4羽, 同じく 18km ほど沖合に2羽を確認しました. アカエリヒレアシシギは 40 羽ほどの確認となりました. 7 月末ともなれば, 沖合では南下する陸生の鳥類が見られることもしばしばあり, 本センサス中には陸から 10km ほど離れた沖合でビンズイが, また 18km ほど離れた沖合にはエゾムシクイが確認され, 後者はしばらく船の周囲を飛んだのち, 舳

先へほんの数秒留まり, その後は霧の中へと消えていきました(写真4).

表 2. 2021 年7月 25 日十勝沖における確認種及び確認個体数(海棲哺乳類)

No.	種 名	確認 個体数
1	カマイルカ	25
2	不明鯨類	1

この度の十勝沖海上は当日の濃霧により視界不良であったことから, 本センサスの結果に大きく影響があったと考えています. しかし, こうした霧深い景色が, 南からの暖気が北から流れ込む冷涼な親潮によって冷やされることで発生している道東太平洋沿岸部の夏らしい風景であるとも感じています.



写真 1. カマイルカとオオミズナギドリ, 2. クロアシアホウドリ標識個体, 3. ウミガラス, 4. エゾムシクイ

■最後に

前述のとおり、2021年における本センサスは諸般の事情により一度だけの実施となり、経年的な十勝沖の鳥類相の変化を考察するには十分とは言えない結果でした。今日まで長引いているCOVID-19の脅威とそれに対応する政策や行動指針などは、任意団体や民間事業者などによる活動に対して様々な形で影響することを、本センサスひとつをとってみても身を以て痛感する機会となっています。

また、2021年9月から11月にかけて、道東太平洋沿岸部で渦鞭毛藻カレニア・セリフォルミスによる大規模な赤潮が発生し、ウニやサケ、タコ、貝類などの主要な漁業資源に対する被害額は国内最大とも伝えられたことがまだ記憶に新しく、十勝沖も例外ではありませんでした。そうした時期に沖合での海鳥の分布状況を確認することが出来なかったことは後悔の念に堪えません。我々人間が利用する漁業資源への

影響はご承知の通りですが、それらを下支えしている小型の魚介類やプランクトンなどへの影響も少なからずあったであろうことから、海洋生態系の動態を反映する鳥類の数にも何かしらの変化があったのかもしれない。

北海道による海水調査の報告では、2022年7月8日から28日にかけての十勝沖ではカレニア・セリフォルミスは検出されていませんが、主に西日本で生息が確認される同属の赤潮プランクトンであるカレニア・ミキモトイが検出されているようです。道東太平洋沿岸部の水温は平年比で2-5℃高い状態が続いていることから、温暖化等による目紛しい海洋の変化について注視しながら、今後も十勝沖でのセンサスを細く長く続けていければと思います。末尾となりますが、本センサスの実施にご協力いただいた船頭さん、乗船者の皆さまに改めて感謝申し上げます。

2. 北海道周辺の海鳥繁殖地

天売島のヒメウ繁殖状況

長谷部真（当会代表）

国内におけるヒメウの繁殖状況

ヒメウは年間を通じて北海道全域の沿岸で見られますが、繁殖地は過去に天売島、恵山、モユルリ島、根室市沿岸で少数が確認されていたに過ぎません（黒田 1965, 阿部・松木 1968）。近年も繁殖が確認され

ているのは天売島と新たに確認された窓岩のみです（天売海鳥研究室未発表, 矢萩 2020）。恵山における繁殖情報もありますが詳細は明らかになっていません。天売島はヒメウの繁殖が経年的に確認されている国内唯一の繁殖地ですが、繁殖つがい数が少ないことから、2006年に環境省レッドデータブックで絶滅危惧IB類に、2017年に北海道レッドリストで絶滅危惧IB類に選定されました。

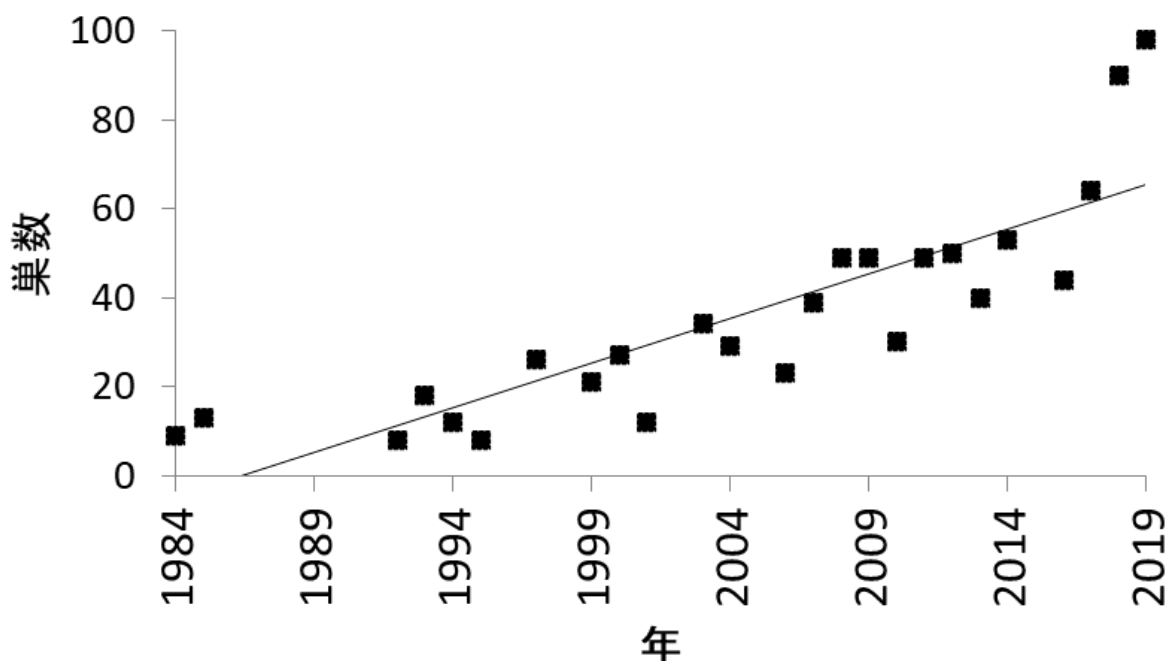


図1 天売島のヒメウの巣数 天売海鳥研究室未発表データより作成 不明瞭な記録を一部除外

天売島のヒメウの巣数は天売海鳥研究室が実施している「海鳥一斉調査」の中で1984年以降の記録が未発表データとして環境省の天売島の報告書の一部に掲載されています（環境省北海道地方環境事務所 2020）。しかしながら、他の繁殖海鳥 7 種（ウミガラス、ケイマフリ、ウトウ、ウミスズメ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ウミウ）と異なり、これまで生態研究や保全活動がなされたことがありませんでした。筆者は海鳥一斉調査の中で、2009年から2014年に天売島のヒメウの巣数調査に調

査員として参加し、また他の海鳥の調査時にも観察してきたことから、天売島におけるヒメウの繁殖状況をここに報告します。

天売島ヒメウ繁殖地

天売島では1950年代から1970年代にかけてごく少数のヒメウが確認されましたが、繁殖記録はなく（Udagawa 1953, 黒田 1963, 環境省 1978）、1981年に3巣以上が確認されたのが初めての記録でした（綿貫ほか 1988）。その後は天売海鳥研究室（未発表）より継続的に調査が実施

されており、1984年から2019年までの年増加率は6.4% (±0.6%)で、2019年には98巣が確認されました(図1)。巣数が増えた原因はわかりません。これに窓岩で確認された2019年の1巣(矢萩2020)を加えた99巣が日本全体の巣数です。

天売島のヒメウは海鳥一斉調査の中で巣数が調べられてきましたが、巣の位置は公表されておらず、詳しい繁殖ステージや繁殖成功率等々の繁殖状況は明らかになっていません。このため、2009年から2014年までの筆者の調査経験からヒメウの繁殖状況を紹介します。



図2 周りに空間のある崖の上で近接して巣を作るウミウ(左)と崖の狭い突起の部分にあるヒメウの巣(右)



図3 ヒメウのヒナ(左)と巣立ちヒナ(右)

天売島の場合、ウミウは崖の岩棚で並んで集団繁殖することが多いのに対し、ヒメウは崖の突起部分の上などに比較的まばらに巣を作ります(図2)。このため、ウミウのヒナは大きくなると巣の周りを歩き回ることありますが、ヒメウはヒナが大きくなっても狭い巣の上にひしめき合ってい

ます(図3)。2009年5月29日に巣に座っている個体の卵を確認しました。繁殖段階の早い巣では7月4日に巣にいるヒナを確認し、7月29日に巣立ちヒナを確認しました(図3)。ヒメウもウミウと同様繁殖失敗することも多く、その場合は巣から親鳥がいなくなりました。2010年は赤岩

対岸で巣が減少し、また 2011 年以降は主要な繁殖地が道路から観察ができないウミウ谷（図 4）に移ったためその後の詳しい繁殖状況は明らかになっていません。

ヒメウの巣と給餌の様子（2009 年）

<https://www.youtube.com/watch?v=psv1UuQTZqA>

ヒメウの巣立ちヒナ（2009 年）

https://www.youtube.com/watch?v=psDLu2EOV_c

ヒメウの巣の位置はウミウと同様に毎年大きく変わっており、翌年から使用されなくなる繁殖地も少なくありませんでした。2009 年は赤岩対岸、オンチャワゴ周辺、カブト岩周辺で巣が確認されていましたが、2010 年にはこの中で確認された繁殖地は赤岩周辺のみとなりました（図 4、図 5）。2011 年以降は赤岩対岸の巣も少なくなり、主な繁殖地はウミウ谷周辺になりました。

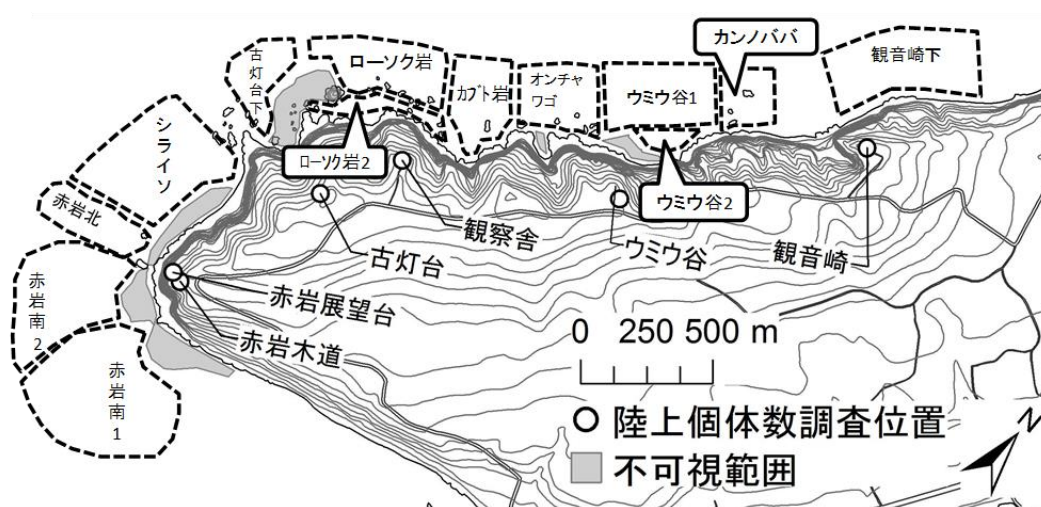


図 4 天売島海鳥繁殖地と地名（環境省北海道地方環境事務所 2020）



赤岩対岸



カブト岩周辺



オンチャワゴ



ウミウ谷

図 5 天売島のヒメウ繁殖地

ヒメウの若鳥はほぼ1年中北海道各地の沿岸で観察されています。天売島がヒメウのほぼ国内唯一の繁殖地にもかかわらず、あまり目立たないところで繁殖しているからか、地味な存在であるからか、絶滅危惧種になってもあまり注目されませんでした。ヒメウの生態はわかっていないことが多いことから、今後は他の海鳥と同様に繁殖生態を明らかにすることが必要です。

引用文献

- 阿部学・松木勝彦 1968.根室市花咲港付近の鳥類.鳥 18:227-246.
環境庁 1978. 特定鳥類等調査.東京,環境庁.
環境省北海道地方環境事務所 2020. 令和元年度国指定天売島鳥獣保護区におけるケイマフリ等海鳥調査報告書.
黒田長久 1963. 天売島海鳥調査(附陸島). 山階鳥研報 3:363-383.
黒田長久 1965. 北海道の鳥類調査.山階鳥研報 4:224-268
Udagawa T 1953. The avifauna of Teuri and Yagishiri Islands, Hokkaido. Tori 13: 68-85.
矢萩樹 2020. 窓岩海鳥調査 2019. 北の海鳥 10: 8-10.
綿貫豊・近藤憲久・中川元 1988. 北海道周辺における海鳥繁殖地の現状. 日本鳥学会誌 37: 17-32.

江差港湾内の養殖いかだで繁殖するウミネコとオオセグロカモメ
三上修（北海道教育大学・函館校）
三上かつら（バードリサーチ/北海道大学大学院水産科学研究院PD）

はじめに

多くの鳥にとって卵やヒナの時期は、捕食者に対して無防備です。そのため、一般には巣は見つかりにくい場所に作られます。たとえば、発見されにくい木の洞や藪の中に作られます。しかしカモメ類の巣は、地上に作られ隠蔽機能がありません。捕食者からは丸見えです。そこで捕食者対策として、親鳥は、哺乳類が近づきにくい崖や岩礁に巣を作り、さらに集団で巣をすることで、近づいている敵を追い払います。

哺乳類が近づきにくい場所として、カモメ類は、自然物だけではなく、屋根の上やビルの屋上などの人工物にも巣を作ります。こういったことは、ヨーロッパでは1940

年代、アメリカでは1950年代から知られており（長谷部 2013）、日本では1980年代から記録があります（三上 2019）。最近は巣を作る人工物のバリエーションが増えており、橋脚や離岸堤（地続きではない防波堤）にも巣を作ることが知られています。特に離岸堤はカモメ類にとって人気物件の可能性が指摘されています（矢萩 2020）。

そのような人工物への営巣場所のバリエーションの1つとして、養殖いかだでの繁殖を観察しましたので報告します。場所は、道南の日本海側に面する江差町です。この港湾内のナマコの養殖いかだに、2017-21年の間（20年は未調査）に、ウミネコおよびオオセグロカモメが巣を作っていました。図1のようないかだが4つあり、その上にまばらに巣がありました。数は全部で10巣程度です。ウミネコが多く、年によってはオオセグロカモメ（図2）の巣が1, 2巣ありました。



図1. 養殖いかだに作られたウミネコの巣が3つあり、残り3羽はただ座っているだけ

養殖いかだは不安定なような気もしますが、防波堤を備えた港湾内にあるので、それほど揺れないと思われます。また海水面が上がっても、養殖いかだは一緒に上昇するわけですから、沈む心配がありません。

ただし巣の数の割には、大きなヒナをあまり見かけませんでした（図3）。何かあったときに隠れたりする場所もないので、生存率は低いのかもしれません。

なお周囲の営巣状況は、すぐ近くに鷗島

という周囲 2.6km ほどの陸繋島があり、その崖に両種が巣を作っていました。近づけない場所が多く正確な数はわかりませんが、周囲で見かける個体数から考えて、ウミネコが数十巣、オオセグロカモメが数巣だと思います。主要な営巣場所はそちらで、一部の個体が、養殖いかだに巣を作っていると考えられます。



図2. オオセグロカモメの巣。ウミネコの巣材（図3を参照）に比べて細く柔らかそう。

養殖いかだと崖では、どちらの繁殖成績が良いのかなどを調査したかったのですが、2022年に江差に行ってみたところ、養殖いかだがなくなってしまっていました。現在、江差町は、前述の鷗島を利用したマリンスポーツ事業を展開しており、港湾内で「スタンドアップパドルボード（SUP）」や磯遊びなどの体験事業を進めているので、そのためだと思います。

こういった人間側の都合で営巣場所が出現したり消えたりするのも人工物への営巣の特徴の1つと言えます。今回のことで改

めて感じたことは、変わったところに巣があるのを見かけたときは「また後でもいいや」と思わず、とにかく記録をとっておくことが重要だということです。



図3. ウミネコのヒナ2羽。こういった窪み（手前の板と奥の板の間に段差がある）などに巣があることが多い。これくらいのサイズのヒナは見かけるが、もっと大きなヒナを見かけるのは稀。ヒナのまだら模様も、養殖いかだの上では、隠蔽効果がなさそう。

引用文献

- 長谷部 真 (2013) 北海道北西部におけるオオセグロカモメが繁殖する海岸沿いの屋根の特徴と巣の位置. Bird Research 9: S13-S18.
- 三上 修 (2019) 鳥類による人工構造物への営巣: 日本における事例とその展望. 日本鳥学会誌 68: 1-18.
- 矢萩 樹 (2020) ゴメの巣, 港にあり. 北の海鳥 11号: 22-27.

青森県今別町の消波ブロックで
営巣したウミネコ
三上かつら（バードリサーチ）

「全国鳥類繁殖分布調査」（以下、繁殖分布調査）は日本全国各地にある2,300コースの鳥を手分けして調べて、鳥の分布図をかく、というプロジェクトです。過去

2回（1970年代、1990年代）は環境省により実施されたのですが、3回目はNGO、環境省、大学の研究者などとの共同事業として実施されました。私は岩手、青森、北海道南部にあるコースのうち、38本のコースを担当しました。今回の報告は、その調査のなかで発見されたものです。



図1. 青森県風間浦の海岸で見かけたオオセグロカモメのコロニーがあると思った岩場。右上の2羽は抱卵姿勢に見える。15巣くらいありそうに見えた。（2019年5月25日）

青森県にあるセンサスコースを調査するため、2019年5月下旬に現地に行ってきました。繁殖分布調査では、「繁殖」の「分布」を調べていますので、ある鳥の繁殖やその可能性がある行動を観察した場合は、その位置を記録していました。ここでいう繁殖やその可能性がある行動とは、たとえばスズメが餌を咥えて巣に飛び込むところを目撃したら繁殖確実、さえずりをきいただけであれば繁殖の可能性あり、とするなどです。設定されたセンサスコース以外でもアンケート調査としてそれらの行動と位置を

記録しておき、最終的にデータをまとめる際には標準地域2次メッシュ単位で繁殖の有無を整理します。そんなわけで、私もあちこちで遭遇した鳥の巣材運びや餌運び、巣の位置などを記録していました。青森県でカモメ類のコロニーといえば、八戸にある蕪島（ウミネコ）や、大間の弁天島（ウミネコ・オオセグロカモメ）がよく知られています。そういった大規模なコロニーはモニタリングの記録があるのですが、そうではない小規模なコロニーでもとにかく地図に載せてやろう、という気持ちでそれら

しい岩場（図1）などを見るとチェックしていました。このような調査を終えて帰宅し、データ入力などしつつ、青森在住のベテランバードウォッチャーの方に電話して「ウミウやオオセグロカモメのコロニーらしきものをどこそで見かけましたよ、繁殖しているんですね」などと話をしてみたところ、繁殖ではなくただそこにいただけの可能性もあるよ、とコメントいただきました。私はこれまで陸鳥が専門だったので、繁殖期の海鳥たちが1日にどれだけ広い範囲を動き回るのか、ということを考えていなかったのです。不覚でした。

これをはっきりさせるにはヒナを見るのが一番だ、と思い、たまたま別の調査に参加予定があった6月下旬に再度、青森を訪れました。

2019年6月27日、気になっていた場所のひとつ、青森県今別町^{ほろづき}にある岩場（図2）を確認しに行きました。いろんな角度からなんとかこの岩場を見ようと観察場所を探していたところ、たまたま^{ほろづき}の漁港で遭遇したのがウミネコの小規模コロニーでした。消波ブロックの隙間を上手く利用した巣があることが確認できます（図3上）。まだ黒い羽衣のヒナもいました（図3下）。



図2. 青森県今別町^{ほろづき}の岩場。上にウミウやオオセグロカモメがとまっている（右下拡大）。（2019年6月27日）

^{ほろづき}では少なくとも15巣程度を確認しましたが、長谷部（2022）が北海道北部の声問にある消波ブロック上のコロニーを目視観察とドローン撮影の両方を行って比較した結果から指摘しているように、見え

ない場所にもっと巣があった可能性があります。

なお、元々決着をつけたかった図2の岩場でのウミウやオオセグロカモメの繁殖については、私の手持ちの機材と限られた観

察時間ではこれ以上詳しく特定できませんでした。ドローンがあれば解決しそうですが、まだその機会にはめぐまれていません。



図3. 青森県今別町襲月にある消波ブロック上で繁殖していたウミネコ（2019年6月27日）

消波ブロックを利用した海鳥の繁殖事例としては、前述した声問の事例（長谷部2022）のほか、北海道東部地域でのオオセグロカモメ（矢萩2016）や、オホーツク沿岸カワウ、ウミウ、ウミネコ、オオセ

グロカモメ（渡辺2020）の繁殖事例があります。近年、ウミネコやオオセグロカモメは全国的に個体数の減少が懸念されています（Senzaki et al. 2020）が、一方で人工物を利用して繁殖の機会が増えつつあるとすると興味深いことです。

引用文献

長谷部真（2022）稚内市声問岬におけるドローン調査による人工物上のオオセグロカモメとウミネコの繁殖状況. Strix38: 129-136.

三上修（2019）鳥類による人工構造物への営巣: 日本における事例とその展望. 日本鳥学会誌, 68(1): 1-18.

Senzaki, M., Terui, A., Tomita, N., Sato, F., Fukuda, Y., Kataoka, Y., & Watanuki, Y. (2020) Long-term declines in common breeding seabirds in Japan. Bird Conservation International, 30(3): 434-446.

矢萩樹（2016）釧路市の港におけるオオセグロカモメの営巣状況. 釧路市立博物館紀要(36):31-34.

渡辺義昭(2020)北海道オホーツク海沿岸における2013年の海鳥営巣数と2014年から2019年までのオオセグロカモメの営巣数増加. 利尻研究, (39): 27-31.

3. 海鳥情報

釧路市における海鳥類の観察記録②
 カイツブリ科～シギ科
 当会広報 矢萩 樹

はじめに

筆者は、大学在学中の2013～2017年までの間を釧路市で過ごし、市内の各所で海鳥を観察しました。前号では、海ガモ類の観察記録を報告しましたが、本稿ではカイツブリ科～シギ科（ヒレアシシギ属）までの観察記録をまとめたいと思います。前

号同様、ここで整理した記録は個人的な鳥見によって得られたものであり、観察時期や場所の偏りにより、釧路市での海鳥類相を正確に反映した記録ではありませんので、ご容赦ください。

観察記録

2013年～2017年までの観察で、カイツブリ科5種、アビ科2種、ウ科3種、ヒレアシシギ科1種が観察されました。観察種のうち、繁殖が記録された種はカイツブリとウミウに限られ、その他の種は渡りや越冬のために釧路市へ飛来していると考えられます。

表 1. 海鳥類の月別の観察記録（2013～2017年）

種名	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
カイツブリ <i>Tachybaptus ruficollis</i>		○			○							
アカエリカイツブリ <i>Podiceps grisegena</i>			○	○	○						○	○
カンムリカイツブリ <i>P. cristatus</i>			○	○					○		○	○
ミミカイツブリ <i>P. auritus</i>	○	○										○
ハジロカイツブリ <i>P. nigricollis</i>			○	○				○	○	○	○	○
アビ <i>Gavia stellata</i>				○							○	○
オオハム <i>G. arctica</i>			○	○		○					○	○
ヒメウ <i>Phalacrocorax pelagicus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カワウ <i>P. carbo</i>			○	○	○			○	○	○	○	○
ウミウ <i>P. capillatus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハイロヒレアシシギ <i>Phalaropus fulicarius</i>								○				
計11種	3種	4種	7種	8種	5種	3種	2種	5種	5種	4種	8種	9種

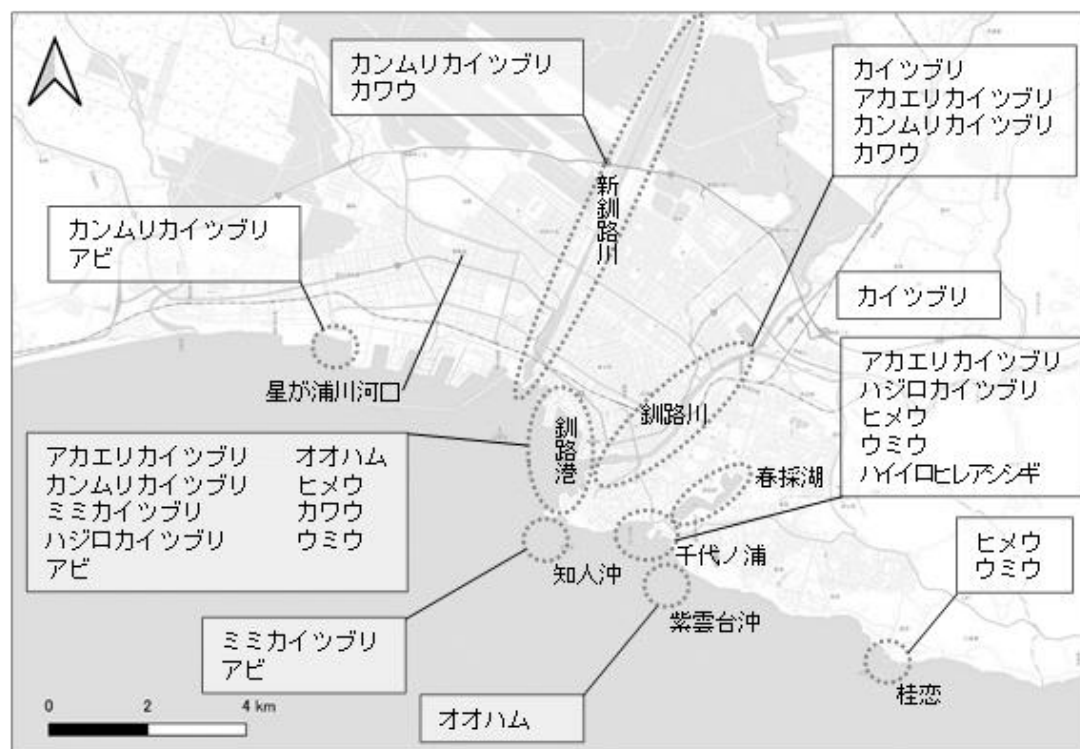


図. 観察種の主な確認場所

① カイツブリ *Tachybaptus ruficollis*

主に春季に釧路川や春採湖で観察されました。春採湖では繁殖が記録され、これは過去にも確認されています（前田・橋本1998）。2月の観察記録が一例あり、ごく少数は越冬している可能性があります。



ミミカイツブリ (2015/12/6 釧路港)

② アカエリカイツブリ *Podiceps grisegena*

春季と秋季から冬季にかけて釧路川や釧路港、千代ノ浦などで観察されました。海域で観察される際は、陸上から目視できる程度の沿岸域でもよく見られました。カンムリカイツブリと比較して、港内や河口域に出現する頻度は低かったです。

③ カンムリカイツブリ *P. cristatus*

春季と秋季から冬季にかけて釧路川や釧路港、新釧路川、星が浦川河口などで観察されました。特に星が浦川河口では数十個体の群れが観察され、当時の道東では最大級の飛来地と考えられました。港内や河口域では、アカエリカイツブリよりも個体数が多い印象でした。



カンムリカイツブリ (2014/9/18 釧路港)

④ ミミカイツブリ *P. auritus*

冬季に知人沖や釧路港で観察されました。個体数は近縁種のハジロカイツブリよりも少なく、港内や河口域で観察されることは稀でした。知人沖では、アビと同所的に観察されました。

⑤ ハジロカイツブリ *P. nigricollis*

秋季から春季にかけて釧路港や千代の浦などで観察されました。カイツブリ科の中では個体数が多く、港内や河口域にもよく出現するため、普通な種でした。秋季の渡来時期は早く、8月にはすでに記録されました。



ハジロカイツブリ (2015/12/6 千代ノ浦)

⑥ アビ *Gavia stellata*

秋季から春季にかけて知人沖や釧路港、星が浦川河口などで観察されました。観察個体のほとんどが単独個体で、群れでは見られませんでした。知人沖ではミミカイツブリと同所的に観察されました。

⑦ オオハム *G. arctica*

12月に釧路港で、6月に紫雲台沖で観察されました。6月に観察された際には、ウトウとともに採餌していました。千嶋（2016）が指摘しているとおり、道東太平洋沖では夏季にも一定数が観察され、釧路沿岸も越夏地としても利用されていると思われます。



オオハム (2014/12/24 釧路港)



カワウ (2016/10/6 新釧路川)

⑧ ヒメウ *Phalacrocorax pelagicus*

ほぼ一年を通じて、釧路港や千代ノ浦、桂恋など広い範囲で観察されました。釧路市内で本種の繁殖はなく、夏季に観察される個体は、全身が褐色の若い個体でした。ウ類の中では冬季の個体数が多く、この時期には最も普通な種の一つでした。



カワウ (2016/3/21 新釧路川)



ヒメウ (2016/4/12 千代ノ浦)

⑨ カワウ *P. carbo*

主に春季と秋季に釧路川や新釧路川、釧路港などで観察されました。釧路市におけるカワウの観察記録については、矢萩(2017b)に詳しくまとめています。釧路市では、2015年秋から目撃回数・個体数が増加しました。観察個体は渡りによる通過個体と推測されますが、どの地域で繁殖する個体群が釧路市を通過しているのかは不明で、個人的に気になるテーマとなっています。

⑩ ウミウ *P. capillatus*

ほぼ一年を通じて、釧路港や千代ノ浦、桂恋など広い範囲で観察されました。釧路市内で繁殖する数少ない海鳥の一種です。個体数は春季から秋季にかけて多く、冬季にはほとんど見られなくなります。本種の繁殖に関しては、矢萩(2015, 2017a)及び矢萩・貞國(2017)に詳しくまとめています。市内では、40つがい程度が繁殖しており、2014年～2016年の3年間で営巣数に大きな変動はみられませんでした。



ウミウ (2017/1/31 釧路川)



ウミウ営巣地 (2014/6/14 千代ノ浦)

⑪ ハイイロヒレアシシギ *Phalaropus fulicarius*

2014年8月に千代ノ浦で記録されました。観察されたのはこの1例のみで、沿岸域への飛来はそれほど頻繁ではないようです。観察時は、防波堤際の海面で採餌していました。

まとめ

こうして学生時代の探鳥記録を振り返ってみると、当時記録した観察種数は実態よりも少なく、釧路沿岸にはさらに多くの海鳥類が生息している印象を持っています。そう考える理由として、今回扱った分類群は沖合に生息する種が多く含まれますが、

スコープを用いて沖合の海鳥を探す頻度が少なかったことがあげられます。今となつては、沖合の海鳥類をもっと観察しておくべきであったと後悔しています。

釧路での後悔を糧に、今後の鳥見では、沖合の海鳥類の観察経験を増やし識別能力を向上させ、地域の実鳥相の把握に努めたいと思います。

引用文献

千嶋淳(2016)北の海鳥4 アビ類. 道東鳥類研究所, 池田.

前田紀子・橋本正雄(1998)釧路市春採湖における水鳥の繁殖状況. 釧路市立博物館紀要 23: 7-12.

矢萩樹(2015)釧路市の海鳥繁殖地. 北の海鳥 1: 15-16.

矢萩樹(2017a)釧路海岸海鳥調査 2016. 北の海鳥 4: 2-5.

矢萩樹(2017b)釧路市におけるカワウの観察記録. 北の海鳥 5: 22-25.

矢萩樹・貞國利夫(2017)釧路海岸における海鳥の繁殖記録. 釧路市立博物館紀要 37: 45-48.

・会報誌『北の海鳥』

今回は船またはフェリーを利用した海鳥調査と津軽海峡周辺のカモメ類の繁殖状況、ヒメウの繁殖状況、釧路港周辺の海鳥の記事でした。海水温が暖かければ南方系の海鳥が北海道近海まで北上してくることや北海道とその周辺の海鳥についてまだまだ知らないことがたくさんあることがわかりました。

会報誌は年2回の発行ですので、次号は2023年の2月頃に発行する予定です。記事を募集しています。内容は新しいものでも古いものでも構いません。ご連絡は長谷

部までお願いします。

hasebemakoto@hotmail.com

・北海道海鳥保全研究会ホームページ

最近、北の海鳥の記事が引用されることが多くなってきました。記事を探しやすいようにホームページに目次を追加しましたのでご活用ください。時折ブログ記事も更新していますので、ぜひご覧ください。

<http://hseabirdconservati.wixsite.com/hseabirdconserveg/blog>

海鳥に関するブログ記事や海鳥繁殖地の追加情報がありましたら、上記メールアドレスにご連絡をお願いします。

北海道海鳥保全研究会 編
会報誌 北の海鳥第十五号
発行日 令和4年9月17日
発行所 北海道天塩郡豊富町西3条5丁目

